神道文化十八号抜刷
（平成十八年十二月一日発行）

淡路島と國生み傳承雑考

本名孝至

淡路島と國生み傳承雜考

本名孝至

國生み傳承の舞臺は、淡路島である。古事記上巻では、伊邪那岐命と伊邪那美命が淤能碁呂嶋に天降りまして、夫婦の道を開かれ、先ず淡道之穗之狹別嶋（淡路島）を生みたまふたとする。そして、伊豫之二名嶋（四國）、隱岐之三子嶋（隱岐島）、筑紫嶋（九州）、伊伎嶋（壱岐島）、津嶋（對馬）、佐渡嶋、大倭豊秋津嶋（本州）を生み、大八嶋國が成立したとする。更に吉備兒嶋、小豆嶋など六嶋を生み、國土を生み竟へたと傳へる。日本書紀（神代巻）では、殷馭盧嶋に降居した伊弉諾尊と伊弉冉尊が夫婦となり、先づ淡路州を以って胞とし、大日本豊秋津州、伊豫之二名州、筑紫州、億岐州と佐渡州、越州、大州、吉備子州の大八州國が生まれたとする。一書には大日本豊秋津州の次ぎに淡路州を生む。淡路州を胞として大日本豊秋津州を生む。殷馭盧嶋を胞として淡路州を生む。などの諸説を掲げてゐる。何れにせよ、淡路（淡道）島が國生み傳承の起因地で、初生の地又は母体なる神とを繋ぐ「胞」の地としてゐるのであり、太古に海人族が定住したといふ淡路島の古傳承が、國史に取り込まれていったものと考へられる。

筆者が奇しきご縁で、淡路の伊弉諾神宮に禰宜として赴任させていただいてから、十七年目を迎へやうとしてゐる。この間に、淡路島の各地を尋ね歩き、國生みの傳承の故地はどこであらうかと思ひつつ、現地での踏査ができたことは有難いことである。素より淺學独善で「そんな神主の独り言」の域であることを豫めご承知おきいただきたい。

本名　孝至（ほんみょう　たかし）
昭和十九年十二月十二日生まれ。皇學館大学文學部國文學科卒。現在、伊弉諾神宮宮司。兵庫県神社庁理事、神道政治連盟兵庫県本部幹事長。専攻、上代文学。

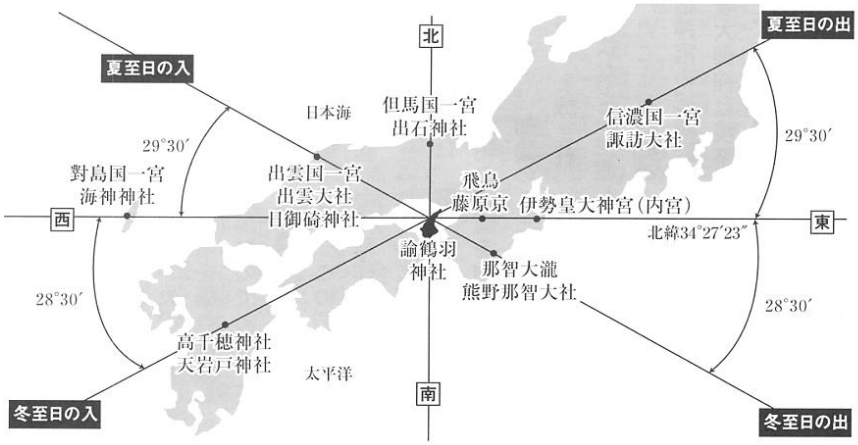
「淡路（道）」といふ地名は、都から「阿波（粟）」へむかふ途次の意であるといふ説が、定説のやうに言はれてゐるが、如何とも腑に落ちないと思ってゐる。……であるならば、國生み傳承では淡路の後で生まれる四國（伊豫之二名嶋）の中の一國だけへの道の意を名稱とするより、むしろ「伊豫路」とすべきところであらう。天正年間に阿波・徳島藩に入封した蜂須賀家が戰功により、淡路國をも領有することになってからは、阿波への路とする説が尤も都合の良い解釋であったこともあらうかと思ふが、記紀の用例でも淡路國の「アハ」には「淡」を充て、阿波國の「アハ」には「粟」と「阿波」を充ててゐることから、明らかに遣ひ分けをしてゐる。更に、都から地方へ向ふ中間の地を「〇〇路」と表記する國・郡名の用例が見當たらないことも、合點がいかぬところである。ならば代論はと問はれると、その結論をもたないといふ爲体なことではあるが、他説をあげると、「アハ」は「オウ」「アヲ」「オホ」などと發音する現象と同義として海に向ふて開けた地とする説、又は青く霞んだ地とする説、天と地を結ぶ靈力の地とする説、琵琶湖と形状や面積が類似してゐることから「淡海」（アハミ→アフミ）に對比する「淡地（道・路）」（アハチ）とする説など、阿波へ行く道（路）の意を否定する説が幾つかあることも事實である。女帝論を上梓した呉善（オソン）花（ファ）女史が、取材のため淡路に来られた際に案内役を務めたご縁があるが、同書の中で「淡路島」を胎児の通る「産道」と意味づける女性の直感には頭が下がる思ひでゐる。「胞」との共通性や、大八州國の島々は淡路を胞として生まれたとする紀の一書の説に通ずるものといへる。秀眞傳の構成では天（ア）・地（ワ）・人（ヤ）の巻としてをり、これを準用すれば「アワ（ハ）」を天地と解することもできる。何れにせよ、神代の創始傳承で諾冉二神が夫婦になられて最初に生まれた神（島）が淡路島で、そこが聖地であるといふ認識があったと考へたいものである。「アハ」が天地、陰陽や、神界と人界を結ぶ意味を表はし、國生み・神生みの主役にあたる伊弉諾・伊弉冉二神を祀る伊弉諾神宮が淡路島に鎮座することに繋がり、更には伊弉諾尊の幽宮を起源とする伊弉諾神宮こそが「アハヂ」の地名の由来だと解釋できないものかと考へてゐるところである。

國生み傳承をどのやうに解釋するかについても諸論があるが、「記」で最初に生まれたこの島を「淡道之穂之狭別嶋」とし、完成した大八州國を「豊葦原水穂國」と表現してゐることに注目したい。駿河湾を臨む静岡市で育った筆者にとっての淡路島とは、瀬戸内最大の島で、太平洋と大阪灣と播磨灘に囲まれ、紀淡海峡と明石海峡によって本州と、鳴門海峡によって四國と隔たり、鯛、蛸、鱧、穴子などが獲れる豊かな漁場に恵まれた漁業の島といふ認識であったが、實際に赴任してみると、稲作が盛んで良質米の産地であり、美味なる

玉葱が採れ、蜜柑・枇杷・苺・無花果などの果実、白菜・甘藍・レタスなどの葉物、各農家では松阪牛・神戸牛など有名な黒毛和牛肉の仔牛を飼育し、ホルスタイン種の酪農の先進地でもある。つまり、淡路島は漁業立地ではなく農業立地であり、その主体は稲作なのであった。収穫を終へた田圃を耕せば一日で畑に變身し、畑は水を張れば直ちに田圃になるといふ豊かな大地をもつ淡路島なのである。三毛作や連作でも土壌が痩せぬやう管理する營農技術も傳統的なものらしいが、第一義的に豊かな土壌である。この稲作に適した土壌が、淡道之穂之狭別嶋の「穂」で、稲作に適した島をイメージするものと考へられ、國生みによって完成した大八州國が豊葦原水穂國と表現されるは、取りも直さず稲作を根幹に置いた肇國の祖先神たちの開拓の記憶を物語るのではないかといふ實感をもってゐる。勿論のこと漁業も盛んであり、枕詞に「御饌向ふ淡路」と詠まれ、古代から稲作、製鹽、魚介類、酥（乳製品）、炭などを生産し、御食國としての優秀な食糧供給地であったことは周知のことでもある。

伊弉諾神宮の起源については、記（伊勢本）に「故れ其の伊邪那岐大御神は淡路（真福寺本には淡海）の多賀になも坐します。」、紀に「幽宮を淡路之洲に構り、寂然に長く隱りましき。亦曰はく、伊弉諾尊功既に至りぬ。徳亦大なり。是に天に登りまして、報命したまふ。仍て日之少宮に留まり宅みましぬ。」とある。神社の創祀を、この記紀の記載によるとすれば、最古初元の神社といふことになる。伊弉諾神宮の鎮座地を「幽宮」にあて、字名では「神宅」ともいひ、伊弉諾大神が老後の餘生を過ごした終焉の地とする。傳承によれば、その居宅の位置に神陵が營まれ、神社の創祀となったとする。「日之少宮」とは、夕日を表現する尊稱とされ、伊弉諾大神が神功により日（陽）の大神の神格に召されたものと解釋できる。このことは、「命」から「神」「大神」へと變化し、更には天照大御神と並ぶ「大御神」へと變化する「記」の敬稱とも連動するものと考へられる。「ワカ」の表現は落日の姿を表し、能曲「淡路」で演ずる「翁」のイメージで、天照大御神の差し昇る朝日の姿に對比することができる。因みに、伊弉諾神宮は北緯三四度二七分二三秒の緯度上に鎮座し、真東にあたる同緯度に伊勢の皇大神宮（内宮）が鎮座するのであり、當地では真東に伊勢神宮が鎮座することを古くから認識してゐた。境内の一角にある神宮遙拝所では、神宮の祭儀日に遙拝式の神事が傳へられてゐる。

そこで、太陽神としての神格を意識して、鎮座地を中心とした太陽の運行を專門家に計測してもらって、次のやうな結論を得た。春分秋分は、同緯度上の伊勢から昇り、對馬の海神神社に沈む。冬至は、緯度線から東南へ二八度三〇分の熊野の那智から昇り、西南二八度三〇分の日向の高千穂峰に沈



伊弉諾神宮を中心とした太陽の運行圖

む。夏至は、緯度線から東北へ二九度三〇分の信濃の諏訪湖から昇り、西北へ二九度三〇分の出雲大社（日御碕）に沈む。更に伊勢と淡路の多賀の中間点が大和の飛鳥（藤原京）であるといふ事實であった。また真南には、平安期の五大修験山の一で、山上にギ・ミ二神を祀る諭鶴羽（ゆづるは）神社が鎮座する淡路島最高峰の諭鶴羽山があり、その眼下三粁の太平洋上には最有力なオノコロ島の比定地「沼島（ぬしま）」がある。諭鶴羽山を「元熊野」とし、熊野那智の縁起に、この山から神靈が移遷されたと傳へることも興味深い。同社の境内には、熊野那智大社篠原四郎宮司（當時）揮毫の「元熊野諭鶴羽神社」の社標が建てられてゐる。真北には、日本海から渡來して神功を果した天日槍命ほかを祀る但馬一宮の出石神社が鎮座する。これらの成果が平成十二年十一月に、伊弉諾神宮の正面參道脇にあった圓形の噴水施設を改修し、その位置關係を現はす「陽の道しるべ」のモニュメントとして整備することに繋がった。

　國生み傳承の舞臺となるのはオノコロ島であり、修理固成の神功を果されたその島は何處であるかといふ問題もある。現在オノコロ島といふ名稱をもつ島はなく、淡路島周邊の島々の中からその比定地を探るしかない。尤も、この傳承は宇宙や地球の創造傳承だとする説もあるので、この限りではないかもしれぬが、淡路島に語り繼がれてゐる傳承地をあげると、①沼島（ぬしま）（南あわじ市）②成ヶ島（なるがしま）（洲本市）③友ヶ島（ともがしま）（和歌山市）

④繪島（あわじ市）⑤先山（洲本市）⑥自凝島神社（南あわじ市）などとなる。各々を詳細に述べるのは略すが、記の傳承ではオノコロ島で夫婦神となられたギ・ミ二神が水蛭子と淡島を生み、天神の布斗麻邇により改めて御合ひて、淡道之穗之狹別嶋を生んだとする構成によれば、當然のこととしてオノコロ島と淡路島は別の島と解釋すべきである。そこで、元々は陸續き（砂州）であったものを開削した②、内陸の⑤⑥は除かざるをえない。⑥については、太古の海進状態では島であったとする説もあるが、神社の成立が太古よりは年代的にかなり下るものとみられ、延喜式はもとより古文献でも創祀を確認できないし、後述する諸條件も満たされてゐないので、記紀のオノコロ島とは言ひがたい。

オノコロ島であるための条件の一は、「八尋殿」が建てられる敷地が確保されるか否かである。八尋を「計測単位」とするか、「立派な廣い」の意にとるかであるが、何れにせよ相當な面積の建物と解釋できる。そして、ギ・ミ二神が婚姻して生活した場所であるならば、飲料水や食糧供給の可否も大切な成因であると考へる。「記」下巻の仁德天皇記に「……淡道嶋に坐して、遙かに望けまして歌ひたまはく、『おしてるや、なにわのさきよ、いでたちて、わがくにみれば、あはしま、おのごろしま、あぢまさのしまもみゆ、さけつしまみゆ』乃ち其の嶋より傳ひて……」が、オノコロ島の唯一の引用で、この歌の詠まれた場所は何處かと尋ね歩いた結果、洲本市由良の生石公園（舊軍の由良要塞跡地）邊りがさうであらうとの結論に達した。そこからの晴天の眺望は、東南側から紀伊半島の田邊、御坊、和歌山、加太の田倉崎、淡島神社、友ヶ島、沖の島、紀淡海峡を隔てて眼下には成ヶ島があり、ゆったりと弧を描いて太平洋が展がる。西南側からは、四國東端の伊島、棚子島、蒲生田岬、から阿南、小松島、德島、松茂までを望む。そして小松島の手前の太平洋上にポッカリと浮かぶ沼島が見える。この島々の中にオノコロ島と記憶されてゐた島があったはずだと考へるのが至當であらうと思ってゐる。そこで、前述の比定地を考察すると斷然有力な島として、「沼島」が浮かび上がってくる。小規模ながら川が流れ、泉があり、田畑も確保できる。周邊は、瀬戸内でも屈指の漁場であり、北西に向ふ入江は波が穏やかで、潮待ち風待

淡路島から見た沼島

ちの寄港地でもあり回船時代の砂濱が點在し、縄文期の土器なども發掘されてゐる。淡路側の土生港と沼島港の約三粁の海峡は巡航船でむすばれ、この海峡を富士山から阿蘇山に至る日本列島構造線が東西に走ってゐる。北に聳える諭鶴羽神社に近い展望臺から眼下の沼島を望むと、手前から右回りに勾玉の形状であることが確認でき、實に絶景である。

沼島の「沼」は、記の天沼矛の「沼」であり、紀の天之瓊矛の「瓊」である。これは、玉・魂・靈に通じ、この勾玉に代表される形状は、生命体や靈魂を表はし、沼島は玉島といふことになる。山頂からの眺望といひ名稱といひ、正にオノコロ島の原形であるとするに相應しい太平洋上の孤島である。近くの鳴門海峡の干満には、沼矛で掻き回した傳承を彷彿とさせる大渦潮もみられ、島内では平成六年に世界的にも珍しい地球創生時の皺といはれる波状の岩石（同心圓構造鞘型褶曲）も發見され、多種多様な岩石層で構成されることで地質學的にも注目されてゐる「沼島」がオノコロ島であるとなれば、科學的な根據も携へて壮大なロマンを描きつつ、子孫たちに大らかで逞しい生き方を示さうとした我が祖先たちの思ひが傳はってくるやうな氣がする。

大自然の恵み豊かな淡路島は、真っ青な海に囲まれ、棚田が展がり、里山の緑が美しい國生みの島である。豊富で安全な美味しい食物があり、正に日本の縮圖だと感じてゐる。この島を國生み傳承の舞臺に仕立てた先人の叡智と、素晴らしい環境を繼續するために努力を重ねてきた島人たちの歴史こそが、基本的な日本文化であるやうに思へてならない。